宮澤雲山の詩に見る菊池五山・柏木如亭からの影響

藤冨史花

一．はじめに

江戸後期の漢詩結社のひとつに、儒者市河寛斎を盟主として結ばれた江湖詩社がある。それまでの詩壇の主流であった、唐詩を専ら推重、また規範として格調を重んじて詩を作った古文辞格調派に対して、江湖詩社は自身の真情を詩に詠もうとする清新性霊派であり、主に宋詩を推重、鼓吹した。

「江湖」とは、世の中、あるいは民間といった意味を表す言葉である。「江湖」というその名の通り、寛斎のもとに集った人々は、それまでの文学（漢詩）の主な担い手であった儒者だけに限らない様々な階層に属し、職業に従事していた。たとえば、後に江湖詩社の四才子と称される、柏木如亭・菊池五山・大窪詩仏・小島梅外のうち、五山は高松藩儒の子であったが、如亭は幕府小普請方大工棟梁、梅外は札差、詩仏は医者の家に生まれた。このような多様な出自を持つ青年たちは、寛斎のもとでその詩才を大いに伸ばし、当時の江戸詩壇を古文辞格調派から清新性霊派へと一新させ、またその後の詩壇を領導する存在となった。

この江湖詩社の四才子の後進に、宮澤雲山という人物がいる。遠山雲如、竹内雲濤と並んで「幕末の三雲」と称された詩人であるが、先行研究としては今関天彭氏による伝記[1]と、内田賢治氏による資料の紹介[2]と晩年についての年譜考証[3]がいくつかある程度で、これまでその作品についてはあまり論じられてこなかった。しかし、今関氏が「清新詩派の晩進として、菊池五山・塩田随斎等との間に位置があり、（中略）諸家の詩集によくその名を見るのである[4]」と指摘するように、雲山は当時の漢詩壇の耆宿菊池五山の後に連なる詩人の一人であり、江戸後期の漢詩壇を考える上でその存在は看過できない。

本稿では、雲山が特に影響を受けたと考えられる先輩詩人、菊池五山・柏木如亭に着目しつつ、雲山の詩を読み解く。それによって、

五山・如亭の詩文や生き方、彼らとの交流から受けた影響が雲山の作品にどのように表れているかを明らかにしたい。

二．宮澤雲山と菊池五山

江湖詩社の四才子の一人、菊池五山は『五山堂詩話』によって一躍その名を詩壇に知られた。『五山堂詩話』は文化四年（一八〇七）から一年に一巻のペースで十巻まで刊行を重ねた後、一旦刊行を中断し、文政元年（一八一八）に『五山堂詩話』補遺として刊行を再開した。補遺となってからは年一巻刊行というペースは崩れたが、天保三年（一八三二）までに正編と補遺とを併せて全十五巻が刊行された。『五山堂詩話』は、我が国において最初に成立した「文学における商業的ジャーナリズム批評」[5]と目される。「詩話」とあることからわかるように、その内容は詩にまつわる談話や評論などをまとめた読み物となっている。また、その一つの大きな特徴は同時代の各地の詩人の詩を有名無名を問わず広く紹介したことである。

例えば『五山堂詩話』巻一では、江湖詩社の後進の詩を紹介しているが、そこでは「江湖の晩進、才子極めて多し。其の尤なる者、吾二人を録す。一は松則武、字は乃侯。（中略）一は宮澤邦達、字は上侯」と二名の人物を挙げている。

二人目に名前を挙げられている「宮澤邦達」なる人物が、宮澤雲山その人である。「『五山堂詩話』にその逸事や詩篇が断片的に紹介されるのみで伝記的資料も乏しく、不明な点が多い」[6]とされるが、ここでは墨田区向島長命寺に現存する「雲山居士の故帋を瘞むるの碑」によって、その経歴を概観してみよう。

居士諱（いみな）は雉、字は神遊、姓は宮澤氏、雲山はその号。武州秩父の人。始め、名は達、字は上侯、細庵と号す。弱冠にして江戸に来たり、詩を市河寛斎先生に学ぶ。詩才俊抜、尤も近体に長ず。「細庵百絶」を著し、芳を藝林に発す。学成るの後、自ら名号を更め、風に吟じ月に哦し、情を邱壑に放ち、北は信越に、西は京摂に、跋渉すること殆ど遍（あまね）し焉。衰老して郷に帰り、嘉永五年壬子二月五日病んで卒す。年七十二。遺藁若干巻有り。米庵翁　其の旧（もと）詩人為るを憐み、居士の故友門人と相ひ謀り、其の故紙を収め、諸れを墨水長命寺に瘞（うづ）め、為に片石を建て題額を書し、余に属して其の由を記せしむ。将に以て居士の名を久遠に存せんとす。誼に篤しと謂ふ可し矣。嗚呼、居士其の形は没すと雖も、其の名は滅せず。其の命は窮すと雖も、其の誉は永（とこし）へに終らんや。江戸　堀川濟撰。常陸　萩原翬書。（原漢文、以下同じ）[7]

安西安周氏によれば、撰者の「堀川濟」と、その撰文を書した「萩原翬」はともに雲山の門人であり、『五山堂詩話』補遺巻五にその名前が見える。「堀川濟」とは多紀家の考証派に属する医家、堀川

舟庵であり、森鷗外『渋江抽齋』にもその名が見えるという。[8]「萩原翠」は幕末に書家として名を馳せ、また萩原乙彦の厳父としても知られる萩原秋巌である。

この碑文によれば雲山は嘉永五年（一八五二）に七十二歳で没したとのことであるから、数え年で逆算すると、生年は天明元年（一七八一）である。弱冠二十歳のころに江戸に出て江湖詩社に加わり、寛斎に詩を学んだということだが、それは寛政十二年（一八〇〇）頃という計算になる。それから数年して『五山堂詩話』巻一が刊行された文化四年（一八〇七）頃には房総を放浪していた。

五山は、江湖詩社の後進として雲山（上侯）の名前を挙げてその七絶二首を引用した章段に続けて、あるエピソードを紹介している。すでに今関天彭氏が宮澤雲山の伝記を述べる中で「この風流佳話が伝へられて、雲山は詩人として位地があるやうになつて来た」[9]として引用しており、周知のものではあるが、雲山と五山との交流の一端を窺わせるものとして煩を厭わず引いてみたい。

上侯、余 未だ面を識らず。其の総中に在りしとき「書懐」に云ふ、

只追風月欲狂顛　只だ風月を追ひて狂顛せんと欲す
自笑詩僊又酒僊　自ら笑ふ 詩僊は又た酒僊なりと
不用相逢問名姓　用ゐず 相ひ逢ひて名姓を問ふことを
江湖社裡小無絃　江湖社裡の小無絃

河米菴 偶たま此の詩を出だして示さる。之れを読みて笑倒す。乃ち寄与して云ふ、

錦城歌吹在何邊　錦城の歌吹 何れの辺にか在る
夜雨聞知已七年　夜雨 聞き知ること已に七年
今日風情休見擬　今日 風情 擬せらるることを休めよ
江湖非復舊無絃　江湖 復た旧無絃に非ず

そのやりとりの全体としては以下のようなものであった。雲山と五山とには、当時まだ面識がなかった。しかし、雲山が房総を流浪していたときに詠じた「書懐」という詩の中で自身を「江湖社裡の小無絃」、すなわち江湖詩社中の若き無絃（無絃は五山の字）であると称し、五山の「風月を追ひて狂顛せんと欲す」を地で行くような、詩酒風流に没頭し、花柳界を舞台とする「深川竹枝」などを物する姿勢を追尋する者に、自らを擬していたのである。

市河米庵（河米菴）からその詩を示された五山は詩を読んで笑い転げ、詩を作って雲山に寄せたのだという。「錦城」は蜀の成都のこと。錦官城ともいう。「歌吹」は歌をうたい、笛を吹くことだが、歌吹海といえば遊興の巷のことであり、ここでは五山が入り浸って竹枝を詠じた花柳の巷等を暗示する。「錦城の歌吹 何れの辺にか在る、夜雨 聞き知ること已に七年」の二句は南宋・陸游「冬夜雨を聴き戯れに作る二首其の二」（『錦繡段』）に「憶在錦城歌吹海、七

年夜雨不曾知（憶ふ 錦城の歌吹海に在りて、七年の夜雨曽て知らず）」とあるのを踏まえる。陸游の詩は、冬の夜に軒端から滴り落ちる雨の音に耳を傾けてその風趣を味わいながら、「かつて役人勤めをしていて、七年もの間、成都という歌舞音曲の賑やかな繁華の巷にあったときは、夜の雨がこれほど素晴らしいものとは知らなかったのだ」と詠じたものである。五山はこの詩句を「夜雨 聞き知ること已に七年」と反転させ、「私はもはや、かつて自身を杜牧に擬していた頃のような遊蕩児ではないのだよ、遊興の巷からは遠ざかり、夜の雨音にひとり静かに耳を傾けるようになってからもう七年になるのだから」と今の自身の境遇を、諧謔を交えて伝えているのである。雲山の五山に対する過剰な思い入れと、ために少しく現状から逸脱した認識を苦笑してたしなめるような形で、五山と雲山との交流は開けた。

また、かつての五山の遊蕩の様子は、『五山堂詩話』巻一の次のような記事から窺える。これもよく知られる記事であるが改めて確認したい。

余 名節検せず。嘗て伊勢に在り。一酒楼に題して云ふ、

百壺醽醁碧於油　　百壺の醽醁（れいりょく）油よりも碧（みどり）に
月逗楼心興尚遒　　月は楼心に逗（とどま）りて興尚ほ遒（つよ）し
粉黛有縁通一笑　　粉黛 縁（えにし）の一笑を通ずる有り
襟懐無地貯些愁　　襟懐 地の些愁を貯ふる無し
紅絃珠唱偏宜夜　　紅絃珠唱 偏へに夜に宜し
風檻露簾平浸秋　　風檻露簾 平らかに秋を浸す
薄倖自知如小杜　　薄倖自ら知る 小杜の如きを
直將此際做楊州（ママ）　　直ちに此の際を将（もっ）て楊州と做さん

滕粲堂、遂に楊州（ママ）小杜の印を鐫りて貽（おく）らる。先生の詩中、仍（よ）りて此の語を用ゐるなり。後に海蠖斎、余が為に言を尽くす。此れより断然として、復た小杜を以て自ら期せず。印も亦た捐てて用ゐず。

尾聯は晩唐・杜牧の「懐ひを遣る」に「十年一覺揚州夢、贏得青樓薄倖名（十年 一たび覚む 揚州の夢、贏（か）ち得たり 青楼薄倖の名）」とあるのに基づく。この杜牧の詩は、かつて揚州・宣州といった江南の地で酒色に耽った自身の青春を追懐し、その「揚州の夢」から覚めて我に返った今、私が得たものといえば「青楼薄倖の名」つまり色街の浮気者という空しい評判だけなのだ、と詠うものである。伊勢四日市に落魄していた頃の五山は自身をその杜牧になぞらえて風流才子を気取っていたといい、そこで「滕粲堂」（中田粲堂）は「楊州（ママ）小杜」と彫った印を五山に贈って戯れた。「先生の詩中、仍（よ）りて此の語を用ゐるなり」とあるのは、この一つ前の記事に師市河寛斎が五山に贈った詩を紹介し、その中で五山を「薄倖の杜郎、年未だ老いず」と言っていることを指す。しかし「海蠖斎」（海野蠖斎。江湖詩社の社友）にその生活を改めるよう説かれた五山は心を入れ

替え、杜牧を気取って酒色に浸る生活を止め、贈られた印も捨てたのだという。四日市に流落して自身を杜牧に擬していた五山に、雲山もまた自身をなぞらえていたのであった。

その後も雲山の名はたびたび『五山堂詩話』に見える。例えば『五山堂詩話』巻四（文化六年（一八〇九）刊）において、五山は「上侯将に其の絶句を刻せんとす。余に刪定を求む。未だ交付するに及ばず。先づ為に幾章をか存せしむ」とその経緯を述べてから、雲山の七絶四首を紹介している。雲山が五山に刪定を求めて上梓しようとしていた絶句というのは『細庵百絶』一巻一冊（文化七年跋）[10]のことであろう。雲山は五山を慕い、第一詩集を世に出すに当たって五山の批正を受けようとしたのである。五山は『細庵百絶』に序文を寄せており、「嘗て余が詩格を愛し、自ら小無絃と称す」と、そこでも雲山が「江湖社裡の小無絃」と自称したというエピソードに言及している。また『細庵百絶』には雲山の門人宮内篤が撰した跋文も付されており、「細庵先生、吾が銚子港に客たり。創めて詩場を開き、烟波吟社と名づく。地方遠近、先生に従学する者、一日は一日より多し。頃、篤佐伯太咸と謀つて先生が生平唫ずる所の絶句一百首を鈔して梓に上せ、以て世に公にす」と、その刊行の経緯が述べられている。今関氏は「雲山が銚子に詩社を設けたのは、文化四五年と推定せられる。『細庵百絶』に依れば、雲山は銚子へは三四度行き、その間に故郷の秩父で塾を開いたり、江戸へ出て浅草で借家したりなどしてをるが、銚子へ詩社を設けたのは最後の時であらう」[11]としている。

『細庵百絶』に収める「秋暁」と題する詩には、苦吟する詩人の肖像が戯画化して描かれており、当時の詩人の実際の姿を窺わせて興味深い。

欲償課詩前夜債　課詩　前夜の債を償はんと欲し
起來尋句曉霜中　起来　句を尋ぬ　暁霜の中
梅花未綻菊先老　梅花未だ綻びざるに　菊先づ老ゆ
此際吟人窮更窮　此の際　吟人の窮　更に窮まる

「課詩」とは詩を作ること。「前夜の債」は、詩を作ることを日課としているが前日は思うように詩が出来ず、前日に作るはずだった分の詩が「債」となって今日まで持ち越されてしまったことを言う。そこで、詩中の人物は「暁霜」、つまりまだ霜の降りている暁の時分から庭に出て、何か詩の題材となるようなものを探しているのである。しかし、霜の降りる晩秋初冬の時分であるから、詩の好材となってくれるはずの梅の花はまだ咲かないし、秋を盛りと咲く菊もすでに末枯れてしまっている。ここで梅と菊とを出すのは、梅が一年の中で最初に咲く花であり、対して菊が最後に咲く花であるという意識があるからである。中国には「二十四番花信風」という考えがあり、二十四節気中の小寒から穀雨に至る八節気を二十四に分け、二十四の候のそれぞれに新たな風が吹くとし、それに応じて開く花

を配当している。各候に咲く花を知らせる風を「花信風」と言った。梅は小寒に配されており、他の花々に先駆けて咲く花とされている。菊については中唐・元稹が「菊花」で

秋叢繞舎似陶家　秋叢 舎を繞りて陶家に似たり
遍繞籬邊日漸斜　遍く籬辺を繞れば 日漸く斜(かたむ)く
不是花中偏愛菊　是れ 花中に偏へに菊を愛するにはあらず
此花開盡更無花　此の花開き尽くれば更に花無きがためなり

と詠み、後半二句の一聯が『和漢朗詠集』に収録されて以来、日本でも菊の花が枯れ落ちてしまうと再び春が巡ってくるまでは、愛でるべき花がないという認識が広まった。つまり、この詩は菊が枯れてしまい、まだ梅の咲かない季節であり、詩材となってくれるような恰好の景物が見当たらないことを述べている。そこで詩人は詩を詠む手だてがないとして「此の際 吟人の窮 更に窮まる」と嘆くのである。前夜の課詩の負債を償う術がなく、単に詩ができないことを「窮 更に窮まる」と表現するのは大げさであるように思えるが、その大仰な措辞が、詩が出来ないと苦しむ自身の姿を戯画化するうえで滑稽味を演出する役割を果たしていると言えるだろう。また、結句は北宋・欧陽脩の「梅聖俞詩集序」に見える次のような議論を

予聞く、世に所謂、詩人達すること少なくして窮すること多し。夫れ豈に然らんや。蓋し世に伝はる所の詩は、多くは古の窮人の辞に出づるなり。凡そ士の其の有る所を蘊(つ)みて、しかして世に施すことを得ざる者は、多くは喜(この)みて自ら山嶺水涯の外に放(ほしいまま)にし、虫魚草木、風雲鳥獣の状類を見て、往往其の奇怪を探る。内に憂思感憤の鬱積する有れば、其れ怨刺を興して、以て羈臣寡婦の歎く所を道(い)ひ、人情の言ひ難きを写す。蓋し愈いよ窮すれば則ち愈いよ工なり。然らば則ち詩の能く人を窮せしむるに非ず。殆んど窮する者にして後に工なるなり。

も踏まえていると考えられる。

この序文は『唐宋八家文読本』巻十一にも採録されており、特に「愈いよ窮すれば則ち愈いよ工なり」、「窮する者にして後に工なるなり」という文句は名高く、人口に膾炙した。[12] そのことは、頼山陽が『増評唐宋八家文読本』（安政二年（一八五五）刊）において「物は好む所に聚る[13]の一語と窮する者にして後に工なるの類、皆不朽の言なり。後人皆此の残膏賸馥を拾ふのみ」と評していることなどからも窺える。古来より議論されてきた、文学（詩）と窮の関係についての一つの集約とも言える論理であり、また文学を志す者にとっての激励の言葉ともなっていることが、この欧陽脩の言葉が時代を超えて広く引用されてきた理由の一つであろう。この詩と窮、また

詩人と窮の関係については、日本では室町時代に義堂周信が杜甫の困窮者像をクローズアップしたことで詩人＝困窮者というイメージが広まったとされるが[14]、「その後、江戸中期における、杜甫に対する評価の高まりがあり、困窮と詩の関連をめぐる議論は再び詩壇の注目を集めはじめたらしく、とくに清新性霊派の党人の間で言及が見える[15]」と指摘されており、この雲山の詩もその流れの中で作られたものと考えられる。

欧陽脩の「愈いよ窮すれば則ち愈いよ工なり」という言に従えば、「窮 更に窮ま」った詩人の詩は、よりいっそう工みなものとなるはずである。しかし、雲山の詩では「課詩 前夜の債」（前の晩に作るべきであった詩がまだ出来ぬ）という、「窮」という状態が、ちょうど今は梅や菊といった詩の題材となる景物がない季節であるという「窮」によって「更に窮ま」ったことで、詩が工みになるどころか、そもそも詩が出来ないとしている。「窮」を世俗的な経済的困窮の意（＝「債」）と、詩人として詩が作れぬ「窮地」との両義に解して、それを生かしているのが「工」みなのである。欧陽脩の言を逆転させることで、諧謔を弄している。

もちろん、欧陽脩のいう「窮」と、雲山の詩中の人物の「窮」はそもそも質の異なるものである。前者の「窮」は栄達の機会に恵まれずに生活苦に陥ることであり、後者の「窮」は単に「前夜の債」を償うための詩ができずに苦しむというものである。しかし、雲山の詩では「窮」を人生全体に関わるものから、単なる「課詩」についてのものへと卑小化することによって、一般的な「窮」という語へのイメージとの落差を生じさせており、それがこの詩の面白みともなっている。

また、雲山のこの詩は『五山堂詩話』巻六（文化九年（一八一二）刊）にある次のような記事と併せて読むと、当時の詩人の実態が垣間見えてさらに興味深い。

詩を学ぶに二多有り。多読多作の謂なり。然れども今日詩を読みて徒らに生奇の語を摘して作料に供せんことを思ひ、意興の托する所を問はず、格律の在る所を省みざる者有り。詩を作りて徒らに字句を飣餖し、毫も音節無く、烹煉の功を用ゐず、琢磨の益を求めざる者有り。皆所謂多しと雖も、亦た奚を以ての為なる者ぞ。故に多読は精読に如かず、多作は精作に如かざるなり。

詩は情の由つて発する所、苟も興ずる所無ければ則ち一月作らざるも可なり。境致一たび到れば則ち一日に幾篇を累ぬるも亦た多きと為さず。必ず詩を以て課と為すが若きは、則ち性霊を夭閼し、才情を桎梏し、粗率牽強の病も亦た随つて生ぜん。一の冬烘先生有り。日に七律一首を課す。除夕客至る。先生方に盛んに燭を張り端座して詩を思ふ。客 其の故を問ふ。先生曰く、今年の詩什、課数に足らず。今夕償還して以て勾帳せんと要するのみ。吁愚も亦た甚し。

多読多作批判から始まるこの一連の五山の批評は、すでに揖斐氏が『五山堂詩話』における「批判と諧謔」を示すものとして紹介しているが[16]、改めて内容を確認してみたい。

「飣餖」は、詩文を作るときに意味のない言葉を並べることのたとえ。「烹煉」は、詩句を鍛錬すること。「夭閼」は、塞ぎとどめること。「桎梏」は、足かせと手かせのことで、束縛することをいう。「粗率牽強」は、荒くて大ざっぱで、無理にこじつけていること。「冬烘」は、頭がのぼせて明晰でない意（冬は寒いはずなのに熱していることから）。唐の鄭薫が試験官となり、誤って顔標を顔真卿の後となして状元としたのを時人が謗った語（『唐摭言』巻八）。ここから転じて「冬烘先生」は田舎の塾の先生を指し、考えが陳腐で時世に通じない人を譏っていう。「勾帳」は、帳消しにすること。

「詩を学ぶ際の方法として、一般に多読多作ということをいうが、そのことで却って、多くの詩を読んで珍しい語を探し出し、それを用いることにばかり腐心して肝心の自身の感興や詩の格律音調をないがしろにしてしまう者がいる。何でも多ければいいというものではなく、多読多作よりも精読精作が肝要だ」として、昨今の多読多作の風潮を批判して精読精作の重要性を説く[17]。

続いて「詩は情から発して詠み出だされるものであり、感興を発することがなければ、一か月詩を作らなくてもよい。反対に、感興を発することがあれば一日に何篇の詩を詠んだとしても多いということはない。もし日に何首詠むべし、と詩を仕事のように割り当てたならば、こころの自然な発露を塞ぎ、才知のはたらきを束縛してしまうし、荒くて大ざっぱで、無理にこじつけた詩になってしまう」と、詩は自然な性情の動きに委ねるべきであるとする、一般的な詩観[18]を述べたあとに、ある寓話を提示する。「ある田舎の塾の先生がいて、日に七律一首を詠むことを課していた。大晦日の夜に客が先生のもとを訪ねると、先生はそのとき燈火を焚き端座して、詩を詠もうとしていた。客がそのわけを訊ねると、先生は「今年作った詩の数が、割り当てた数に満たないので、今晩その分の詩を詠んで帳消しにしようとしているのだ」と答えた」といい、五山はそれを「愚も亦た甚し」と嘆いている。

この五山の記事と、雲山の「秋暁」詩を併せて読むと、当時の詩人の姿が一層髣髴とするように思われる。雲山は、五山の言う多読多作よりも精読精作に努めるべき、というような一般論はもちろん承知していただろう。また、五山のいう「冬烘先生」のように、多読多作を旨として日に決まった数の詩を詠むことを課し、それを達成するために興を催したわけでなくとも詩を作る、という生真面目ではあるが、詩とは無縁な人も当時少なくなかったことと思われる。この「冬烘先生」の状態は、雲山が自身のこととして戯画化した「欲償課詩前夜債」とぴったり対応する。五山と雲山とが共に詩について論じたときには、当時の詩人たちのこのような多読多作の風潮についての批判が話題に上ったかもしれない。『細庵百絶』の刊行よ

りもこの記事のほうが後だが、おそらく雲山は『五山堂詩話』に見えるように、多読多作に傾きがちな当時の詩人たちの詩作の在り方への揶揄と諧謔を多分に含んで「秋暁」詩を詠んだのではないだろうか。

三、宮澤雲山と柏木如亭

先に、雲山は江湖詩社の詩人の中でも特に五山を慕ったことを述べたが、同じく江湖詩社の中で雲山が最も親しく交流したのは梁川星巖であったらしい。今関氏は「雲山は星巖に長ずること九歳、後に最も親しい間となつた」と言っている。そのことは例えば、大沼枕山の第一詩集『房山集』（天保九年（一八三八）刊）に雲山が寄せた次のような題詞に徴することができる。[19]

星巖是弟五山兄　星巖は是れ弟　五山は兄
久訂吟壇三友盟　久しく訂す　吟壇　三友の盟
今日放他出頭地　今日　他に出頭の地を放せば
新添一位枕山生　新たに一位を添へん　枕山生

今関氏はこの詩を引いて「雲山に依れば五山を兄とし星巖を弟とし、自分はその間に座を占めて、久しや詩壇の三友となつてゐた様子が分るのである」としている。雲山と星巖の交流は、早くは文化十三年（一八一六）頃、星巖が西遊するに際して雲山に贈った「宮澤上侯に別る」（『星巖甲集』巻一）という詩に見える。また、嘉永元年（一八四八）に雲山が京都遊歴に出た際には京都に寄寓していた星巖を訪ねており[20]（「梁星巖の鴨東聊逍遥処を訪ふ」『三雲集』）、その交流は雲山の晩年に至るまで続いていたことが窺える。

雲山と最も親しかった星巖が、その青年期に特に如亭から影響を受けていたことは良く知られている。その一端を挙げると、たとえば如亭は自身の遺稿の整理出版を星巖に託しており、それは『如亭山人遺藁』（文政五年（一八二二）刊）として刊行されたが、その巻末には如亭が星巖に宛てた手紙の文面が、「梁伯兎に与ふ」と題して掲載されている。手紙の内容は、晩唐・高蟾の「春風に対す」（『聯珠詩格』巻五）という題の七絶についての解釈を、如亭が星巖に説き示すものである。如亭は友人の葛西因是から、唐詩や詩論・詩法について説かれたことがきっかけで、自身のそれまでの宋詩推重の詩論・詩法から唐詩推重へと転じていたが、星巖もまた因是や如亭の影響を受けて唐詩推重へと転じたのであった。[21]このように如亭は、詩論・詩法の形成という、詩人星巖の根幹を成す要素に多大な影響を与えている。

では、その星巖と最も親しかったという雲山と、江湖詩社の先輩にあたる如亭の交流はどのようなものであったであろうか。雲山が江湖詩社に参加した寛政十二年（一八〇〇）頃には、如亭はすでに幕府小普請方大工棟梁の職を辞して信州を遊歴していた。その後は

雲山も四方を放浪しており、またこの頃の二人の直接の交流を窺わせる資料も今のところ見出せない。雲山は江湖詩社の俊才たる先輩詩人、柏木如亭の名前やその行状を江湖詩社の社友を通じてしばしば耳にしていたであろうが、互いに各地を遊歴していることが大半だったために、直接面会する機会は長らくなかったのかもしれない。もしくは、如亭が江戸に戻った際にどこかで対面していたであろうか。文化十二年（一八一五）には、雲山も如亭も江戸に滞在しており、如亭はこのとき星巌と知り合ったことから、あるいは雲山もこのころに如亭と対面を果たした可能性もある。この年の九月には、江湖詩社を代表する四名の詩人、市河寛斎・柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山の七絶各百首を収めた『今四家絶句』が刊行されており、雲山は北原秦里、星巌とともに編者として名を連ねている。四年後の文政二年（一八一九）には如亭が寄寓先の京都で没してしまうので、如亭と雲山の交流は如亭と星巌、あるいは雲山と星巌の交流ほど親しいものではなかったようだが、いくつか二人の交流を窺わせることがあるので、それを次に見ていきたい。

如亭は、自身が編集した詞華集『海内才子詩』五巻三冊（文政三年（一八二〇）刊）において雲山の詩を五首採っている。『海内才子詩』は、如亭が土御門安倍菊坡に委嘱されて編んだ「当時の三都の詩人をはじめとして全国の目ぼしい詩人たちのほとんどすべて」[22]を網羅した詞華集となっている。「京都之部」「江戸之部」「大坂之部」「各国之部」「羽流淄流之部」「閨秀之部」の六部に分かれて詩人が配列されており、雲山は「江戸之部」の中に置かれている。採られた雲山の詩五首の題だけを挙げると「蘆花被」、「温柔郷」、「信山の客舎」、「壁に題す」、「信山三月二十五日の雪」であり、概ね雲山が信州に遊んだときの作かと思われる。雲山の信州遊歴の時期については、『五山堂詩話』巻六（文化九年刊）に「上侯 信中に遊び」と見えるので、文化八年頃か。また『海内才子詩』は、刊行されたのは文政三年だが、「文化九年頃にはだいたいの編集を終えて、すでに版木に彫られてもいたようであるが、如亭が絶えず四方に遊歴して、京都に在る日が少く、それを校訂することができないままに歳月が流れ、ついに文政二年に如亭が死んでしまったために、やむを得ず、かねてからその編集の補佐をしていた安倍家の塾の都講鈴木竹坡がその仕事をうけついだ」[23]という事情があり、『海内才子詩』編集の時期と雲山の信州遊歴の時期は合致する。雲山の文化八、九年当時の詠作を、如亭は江湖詩社の社友の誰かから伝えられたものかと推測される。

『海内才子詩』に見える雲山の詩は、『五山堂詩話』や、雲山の刊行された他の詩集には見えない。その中の七律「温柔郷」は、題の通り遊里を詠んだ詩であるが、酒色に耽ったと思しい青年期の雲山の行跡を窺わせて興味深いので、次に引く。

不曉天寛好放遊　　不曉天 寛くして 好し 放(ほしいまま)に遊ぶに
老烏何必向糟邱　　老烏 何ぞ必ずしも糟邱に向はん

人迷桃李花開日　人は迷ふ 桃李 花開くの日
誰信梧桐葉落秋　誰か信ぜん 梧桐 葉落つるの秋
一片嬌雲生枕上　一片の嬌雲 枕上に生じ
五更殢雨散床頭　五更の殢雨 床頭に散ず
多情小杜今安在　多情の小杜 今安くにか在る
喚起渠濃欲贈侯　渠濃を喚び起して侯を贈らんと欲す

「不暁天」は、夜の明けない空のことだが、ここでは夜通し宴が続く遊廓の比喩。如亭の「吉原詞」其の六（『詩本草』）に「王孫 百万 纏頭の費え、買ひ得たり 東風の不暁天」とある。「老烏」は、ここでは雲山自身を指すか。「糟邱」は、酒の糟でできた丘。夏の桀王が飲酒に耽り、その酒糟は丘のようになったと伝えられ、それから転じて飲酒に耽ることの喩え（『韓詩外伝』巻四）。第三句は陶淵明『桃花源記』を踏まえるが、ここでは遊里の比喩。第五、六句に見える「雲」と「雨」とは、楚の懐王が高唐に遊んだ際に、昼寝の夢の中で巫山の神女と契り、神女が去るに臨んで「旦には朝雲となり、暮れには行雨となる」と言って立ち去ったという「巫山の雲雨」の故事（戦国楚・宋玉「高唐賦」）を踏まえて、男女の情事を暗示する。「殢雨」は「殢雲尤雨」の略で、これも男女の纏綿たる歓愛、男女の情交の比喩。「尤」「殢」はまとわりつくこと。「多情の小杜」は、晩唐の詩人、杜牧のこと。第一節でも触れた、杜牧の「懐ひを遣る」に「十年一覺揚州夢、贏得青樓薄倖名（十年 一たび覚む 揚州の夢、贏ち得たり 青楼薄倖の名）」とあるのを踏まえる。「多情」も「薄倖」も、浮気なこと。「渠濃」は「渠儂」の誤りか。とすれば、三人称代名詞で、ここでは冥界の杜牧を指す。杜牧に関しては次の逸事がよく知られる。「杜牧は宣州の幕中にいた若いころ、湖州（浙江省）に遊び、十余歳の美少女を見かけて、その母親に会い、結納金を渡して約束した。「私は十年も経たないうちに、ここの長官（刺史）となる。もし十年たっても来なかったならば、他人に嫁がせてよい」と。その後、諸州の長官を歴任し、ようやく湖州刺史になったときには、すでに十四年が過ぎていた。約束の娘は三年前に嫁ぎ、三人の子を生んでいた[24]。そこで「花を歎く」詩を詠んで、そのことを傷んだという（『太平広記』二七三所引、『唐闕史』）。尾聯の意味は、この逸事を踏まえて、「千年近く昔のことだから、杜牧の姿はどこにも見当たらない。杜牧は「侯」になるのが遅くて、意中の少女を他人にとられたが、私はあの風流才子に「侯爵」を贈って、十年の期限より前に少女を娶らせてやりたい」といったところであろうか。ここには平生貧に苦しんでいた雲山が、時に意にかなった妓女を相手に散財しても、身請けすることなどは見果てぬ夢であったという実情への歎きが込められていて、せめて自分の理想とする杜牧さんにはその夢を叶えた存在であって欲しかった、ということであろう。

詩の全体は、「夜通し賑やかに宴の続く遊郭で思う存分遊ぼうではないか、必ずしもお酒を飲まなくたっていい。廓の中は桃李の花

が咲く桃源郷の春のように華やかで暖かく、外は梧桐の葉が落ちる秋だとは一体誰が信じるだろうか。遊女と一晩枕を交わすが、その歓情も朝方になれば雲雨のごとく消えてしまう。だからせめて冥界の杜牧を呼び起こし、あの多情の風流才子に「侯爵」を贈って、十年の期限より前に少女を娶らせてやりたいものだ」という意味になろうか。

この詩から窺えるように、雲山にも如亭と同じく烟花の癖があったと思しい。「妓に寄す」（『細庵百絶』）など、遊女に寄せる纏綿たる情緒を詠じた詩もしばしば見出せる。

この詩を『海内才子詩』に採った如亭もまた、「吉原詞」と題する連作の竹枝詞を詠じている。その内容は、吉原の風景や遊女の一生を哀歓織り交ぜて描き、吉原で遊蕩に耽った自身の経験を錦絵の如く鮮やかな詩世界に結実させたものとなっている。如亭は「ゆく所として色をもつてあやまらざるはなし」（『間叟雑録』）と評されるほどのプレイボーイであった。遊女との交情を詠んだ雲山のこの詩を見た如亭は、自分と相通ずるものを感じ、ちょうどその頃編集していた『海内才子詩』に採らずにはいられなかったのではないか、などと思わされる。

先に、雲山は秦里・星巌と共に『今四家絶句』の編集に与ったことを述べたが、他にも如亭の詩を収める詩集の刊行に携わっている。『崑岡炎餘』（文政九年（一八二八）刊）[25]である。市河寛斎の「北里歌」十一首とその補遺五首、如亭の「吉原詞」二十三首、五山の「続吉原詞」六首を収めたもので、雲山は中村仏庵と共に校訂者として名前を掲げられている。雲山は、五山の「続吉原詞」に識語を付している。「五山翁の続吉原詞、句句巧緻にして言言実際なり。河柏二翁も亦た将に衽を斂めんとす」と評して、「河柏二翁」すなわち寛斎と如亭も、「衽を斂め」る、つまりえりを正して敬意を表するだろう、と五山を称揚するが、雲山はこれら一連の竹枝詞の流れを汲んで、自身も「銚子竹枝詞」（『細庵百絶』）などを詠じていたのであった。

これらは、如亭と雲山が直接互いについて言及しているものと見做すことは難しいかもしれないが、この他にも雲山には如亭を意識して詠んだと考えられる詩があるので、次にそれらを見ていきたい。

雲山は弘化四年（一八四七）、六十七歳のときに剃髪し、その感慨を次のような詩に詠んでいる。

新卸儒巾頭似氷　新たに儒巾を卸して頭は氷に似たり
天公還我水雲僧　天公　我を還す　水雲僧
三歸五戒皆依了　三帰五戒　皆な依了す
貪酒一条唯不能　貪酒の一条　唯だ能はず

（「剃髪」『湖山樓詩屏風』第二集）

「三帰五戒」は仏教語で、「三帰」は仏・法・僧の三宝に帰依すること。「五戒」は在家の守るべき五種の禁戒で、不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒のことを言う。「依了」は承知する、同意

するという意味の口語的表現。「剃髪して僧みたような形（なり）になり、「三帰五戒」の仏教の教えは皆な承知したが、酒を飲まないという禁戒だけは守ることができない」と諧謔を弄する。

『湖山樓詩屏風』第二集（嘉永元年（一八四八）刊）（以下、『詩屏風』）の評には「三四、水滸伝より来る。是れ老人得意の処なり」とあり、転結句が『水滸伝』「趙員外 重ねて文殊院を修め、魯智深 大いに五台山を鬧（さわ）がす」の、剃髪得度した魯智深（花和尚）が、五台山の長老の智真に三帰五戒を授けられ、更に趙員外からもわが身を省みて自重するようにと言い含められて「都依了（すべて承知しております）」と答えたのにも関わらず、二度も不飲酒戒を破り泥酔して寺に帰り大暴れした為、破門された件（くだり）を踏まえることを指摘する。雲山も魯智深に劣らぬ相当な酒好きであったらしい。しばしば酒を詩に詠じており、「酔帰顛躓して二歯を折り戯れに作る」（『三雲集』）などという詩もある。

『詩屏風』の雲山小伝には「餘事に能く稗史小説を読む。方言俚語の人の解するあたはざる者、老人之を釈し、了了として能く人をして解頤せしむ。又た一長伎なり」とあり、その「稗史小説」の素養が詩作にも反映されていたことを窺わせる詩である。雲山は支那小説を講じ、月琴をも善く弾じたが、今関天彭氏によれば支那小説も月琴も遠山荷塘に教えを受けたものであるという。[26]

今関氏はこの詩を引いて「柏木如亭の前踪を追いてか雲山もまた剃髪した」[27]と言っているが、雲山が剃髪した時に作った詩はこの詩のほかにもう一首確認される。雲山の自筆詩稿と見られる『雲山居詩抄』[28]（国文学資料館蔵、ナ8-393）に「薙髪」の題で七絶二首が収録され、其の一は『詩屏風』に採録されるがやや字句に異同があり、転句を「略依了」、結句を「一條」に作る。次に示す其の二は刊本には見られないものである。

無用衰翁是散樗　無用の衰翁 是れ散樗
薙除頭髪野僧如　頭髪を薙（そ）り除きて野僧の如し[29]
鬚髯且免梳霜累　鬚髯（ほうぜん） 且（しば）く免る 霜を梳るの累（わづらひ）を
遮莫人呼作禿驢　遮莫（さもあらばあれ） 人の呼びて禿驢と作（な）すに

「散樗」は「散木」と「樗櫟」のことで、役に立たないもの、無能の人物を指す（『荘子』逍遥遊、人間世）。「鬚髯」は、頭髪の乱れた様。「梳霜」は白髪を梳ること。「霜」は霜のような白髪のたとえ。「禿驢」は、禿坊主のこと。僧を罵っていう。「老い衰えた私は、散木樗櫟のように役に立たない無用の存在だ。頭髪をすっかり剃って田舎の僧のような形（なり）になったので、ぼさぼさの白髪頭を梳る面倒もなくなった。人が私を禿坊主と呼ぶのも好きにさせておこう」と、諧謔を交え、老境に到って髪を下ろした自身の感慨を詠じている。雲山はこの詩を作る際に、如亭のある詩を踏まえていると考えられる。今関氏が「柏木如亭の前踪」というように、如亭も享和二年（一八〇二）に剃髪しているが、その感慨を詩に作った「壬戌除夕、髪

を下して戯れに題す」（『如亭山人藁初集』）と題する七律がそれである。

頭髪除來恰歳除　頭髪 除き来つて恰も歳除く
明朝且喜不須梳　明朝且く喜ぶ 梳ることを須ゐざるを
腰間欠久新磨剣　腰間 欠くこと久し 新磨の剣
籠底焚空舊妓書　籠底 焚きて空しうす 旧妓の書
守歳燈寒遊子様　歳を守る燈は寒し 遊子の様
迎春羹冷野僧如　春を迎ふる羹は冷やかにして 野僧の如し
胸前俠気初銷盡　胸前の俠気 初めて銷し尽くし
従客罵來呼禿驢　従す 客の罵り来つて禿驢と呼ぶに

題にある「除夕」とは大晦日の夜、除夜のこと。「籠底」は竹で編んだ箱の底。「歳を守る」とは、大晦日の夜に眠らないで夜明かしすること。「春を迎ふる羹」は、正月の雑煮。

自身が髪を「除」いたのとちょうど同じくして旧歳も「除」いた、と戯れている。先述した雲山の「秋暁」結句の「窮更窮」のような、同字反復し、各字のニュアンスを異にするという修辞は、如亭得意のものであったことを知る。尾聯では「胸前の俠気 初めて銷し尽くし」、つまり胸中の男気が、剃髪したことでようやく消え失せた、だから客が禿坊主と呼んでも放っておこう、と諧謔を弄しながらも、自分がもう若くないことを静かに自覚しているのである。如亭はこのとき四十歳、老境に入りつつあった。

如亭の詩に「且く喜ぶ 梳ることを須ゐざるを」とあるが、雲山も「鬚髯 且く免る 梳霜の累を」と詠んで、同じく頭髪を梳る面倒がないことを喜んでいる。また、雲山の詩の結句「遮莫 人の呼びて禿驢と作すに」は、如亭の詩の「従す 客の罵り来つて禿驢と呼ぶに」という句をほぼそのまま用いていると言えるだろう。雲山は、如亭の詩に見える「野僧如」「禿驢」の語を意識的に押韻の箇所に用いていると考えられ、そのことによって雲山の詩は如亭の詩と同じ上平声六魚の韻となっている。絶句と律詩という形式の違いはあるが、雲山の意識としては如亭の詩に次韻したものだったのかもしれない。今関氏の言うように「柏木如亭の前踪を追」って雲山が剃髪したのかどうかは定かでないが、この詩に照らせば、このときの雲山の胸に如亭の剃髪の事跡が去来したことは疑いを容れないであろう。

また、雲山は剃髪した翌年の嘉永元年には京都に遊歴し、如亭の墓の苔を掃っている。その際には「如亭翁墓」（『三雲集』）という七絶を詠じた。[30]

埋骨東山四十秋　骨を東山に埋む 四十秋
江湖當日擅風流　江湖 当日 風流を擅にす
一言來告公應笑　一言 来たり告ぐ 公 応に笑ふなるべし
白面郎今雪滿頭　白面の郎 今 雪 頭に満つ

「骨を東山に埋む」は、如亭が京都の東山永観堂に埋骨されたことをいう。如亭が亡くなったのは文政二年（一八一九）であり、実際は約三十年前のことだが、「四十秋」としているのはあるいは雲山の記憶違いであろうか。「江湖」は世間、世の中の意とともに、如亭と雲山が参加した江湖詩社の意も含むであろう。「公」は、ここでは如亭への敬称。「白面の郎」は、年少で経験を積んでいない青年。ここでは若き日の雲山を指す。この語によれば、雲山と如亭は雲山が青年の頃に面識を通じていたようである。「雪 頭に満つ」は、雲山の白髪頭のたとえ。

「如亭翁、あなたがここ東山に埋骨されてから四十年の歳月が流れ、あなたや他の江湖詩社の詩人たちが風流韻事を事として世間で思うままに振舞っていたのも、遠い昔のことになってしまいました。私が訪ねてきたことを告げたら、あなたはきっと笑うでしょうね。かつては生白い顔の青二才だった私が、今や白髪頭の老いぼれになっているのですから」と、如亭や他の江湖詩社の詩人たちが健在だった昔を懐かしみ、かつて若造だった私も顔ではなく頭が白くなってしまった、と諧謔を弄しながらも、老いの感慨を滲ませている。その親し気な詠みぶりには、雲山から如亭への敬愛の念が表れている。

四. 結び

ここまで、五山や如亭からの影響が見られる雲山の詩をいくつか見てきた。雲山は五山に自身を擬え、それを詩に詠んでいた。また、当時の人々の詩作が多読多作に傾いていることについての批判的な姿勢を雲山と五山が共有していたことを窺わせる詩も確認した。雲山は江湖詩社の中でも特に五山を慕い、親しく交流していたようである。

一方、雲山と如亭については、二、三の詩作を除けばその交流の実態を窺わせるに足る資料を見出せなかったので、江湖詩社の先輩後輩である二人の交流は、同じく先輩後輩の関係である五山と雲山、あるいは如亭と星巌ほどは親密なものではなかったかもしれない。しかし、剃髪の事跡や如亭墓の掃苔など、雲山はしばしば如亭を面識のあった人として懐かしく思い出していたことが窺えた。雲山の行状は「風に吟じ月に哦し、情を邱壑に放ち、北は信越に、西は京摂に、跋渉すること殆ど遍し」（前掲「雲山居士の故帋を瘞むるの碑」）と述べられているが、その足跡は「山人 四方に客遊す。其の迹多くは信濃越後に在り、或いは伊勢駿河に在り、又た平安備中の間に在り。其の北に在るや忽ち又た南に在り」（葛西因是撰「柏山人碑」）と評された、如亭の漂泊流浪の様と重なる。江湖詩社の先輩というだけでなく、自身と同じく烟花の癖を有し、また遊歴を事

とし四方に漂泊して旅の中で死んでいった流浪の詩人如亭の姿を、雲山は自身に近しいものとして、あるいは自分自身の姿と重ねながら折に触れて思い返していたのではないだろうか。

本稿では、雲山の詩を五山、如亭からの影響という側面から見たが、あくまでそれは雲山の詩の性格の一端を確認したに過ぎない。雲山の詩全体や、他の側面からの考察については今後の課題としたい。

注

（1）今関天彭「宮沢雲山の生涯」（『雅友』五十七号、一九六二年六月に初出、『江戸詩人評伝集 一』（平凡社、二〇一五年）に再録。本稿では後者を参照）。

（2）内田賢治「宮澤雲山詩稿『雲山居詩抄』について」（『太平詩文』第四十三号、二〇〇九年四月）、「宮澤雲山逸事」（『太平詩文』第四十八号、二〇一一年二月）。

（3）内田賢治「晩年の宮澤雲山（一）」（『太平詩文』第四十四号、二〇〇九年九月）、「晩年の宮澤雲山（二）」（『太平詩文』第四十五号、二〇一〇年二月）。

（4）注（1）に同じ。

（5）揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』（角川書店、二〇〇一年）、十頁。

（6）内田賢治「宮澤雲山詩稿『雲山居詩抄』について」（『太平詩文』第四十三号、二〇〇九年四月）。

（7）引用は長命寺に現存する石碑によった。訓読は安西安周「医人と文人 堀川舟庵と宮澤雲山」（『典籍』第二十二号、一九五七年一月）ならびに内田賢治「晩年の宮澤雲山（一）」（『太平詩文』第四十四号、二〇〇九年九月）を参考に私に読み下した。以下、引用した漢文は原則として原文に付された訓点に従って訓読したが、適宜私に改めた。

（8）安西安周「医人と文人 堀川舟庵と宮澤雲山」（『典籍』第二十二号、一九五七年一月）。

（9）注（1）に同じ。

（10）『細庵百絶』（国文学研究資料館蔵本ナ8・336を参照）は文化七年に刊行されたと思しいが、後に市河寛斎の『寛斎百絶』、大窪詩仏の『詩聖堂百絶』とともに合刻され三巻一冊にして『三大家百絶』という題で文政八年（一八二五）に文會堂から刊行されている（国文学研究資料館蔵本87・199を参照）。文政年間になると、江湖詩社の盟主市河寛斎と、当代随一の流行詩人であった大窪詩仏と並んで「三大家」と称されるほどに雲山の詩名が揚がっていたことを窺わせる。

（11）注（1）に同じ。

（12）五山も『五山堂詩話』巻二（文化五年刊）でこの議論について言及している。「詩は窮して後に工なり。亦た即ち孟子の所謂、先づ其の心志を苦ましむる者なり。我輩、平生力を窮の一字に得ること少なからず。世間紈袴子の詩を作るや、広く諸集を購（あがな）ひ、備はらざること有る無し。曾（すなは）ち半年ならずして、之を高閣に束ぬ。通習皆な然り。近日此の窠を脱する者は、特（ひと）り島梅外一人のみ。始終変ぜず、詩も亦た益ます工なり。然れども、島の初作は都て甚だしくは佳ならず。一旦落魄して奥中に客遊す。都に帰りての後、方に始めて凡ならず。益ます古人の言果たして我を欺かざるを信ず」と、江湖詩社の四才子の一人、小島梅外を「一旦落魄して奥中に客遊するという「窮」によって詩が「益ます工」になった例として挙げている。

（13）欧陽脩「集古録目序」（『唐宋八家文読本』巻十一にも収録）の冒頭の一文を指す。

（14）太田亨「日本中世禅林における杜詩受容―中期における杜甫の困窮像について―」（『愛媛大学教育学部紀要』第六十三号、二〇一六年）。

（15）井上一之「佐羽淡齋と文学―「詩窮説」を中心に」（『斯文』第百三十二号、二〇一八年三月）。

(16) 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』「第九章　批判と諧謔」（角川書店、二〇〇一年）。

(17) 柏木如亭も『詩本草』（文政元年（一八一八）自序、文政五年（一八二二）刊）において「詩の法に依らざるは享保以来の恒例にして、深く近人を怪しむに足らず。吾且く贈るに一片婆心の言を以てす。自今自後、門を杜ぎ香を焚き、唐宋名家の諸作を取りて平心に熟読せば、則ち悟入日を計へて待つ可し」と、精読、熟読の重要性を説いている。

(18) 『毛詩故訓伝』大序に「詩とは、志の之く所なり。心ありて志を為す、言発して詩と為る。情は中に動きて言に形はる」と見える。

(19) この詩は『三雲集』（明治三年（一八七〇）序）にも「大沼枕山房山集題詞二首」其の二として収められている。

(20) 内田賢治「晩年の宮澤雲山（二）」（『太平詩文』第四十五号、二〇一〇年二月）参照。以下、雲山の事跡に言及する際の年次は当論文、ならびに同氏「晩年の宮澤雲山（一）」（『太平詩文』第四十四号、二〇〇九年九月）による。

(21) この間の事情については、揖斐高『遊人の抒情　柏木如亭』「第五章　詩法転換」（岩波書店、二〇〇〇年）に詳しい。

(22) 『詞華集　日本漢詩　第七巻』（汲古書院、一九八三年）、富士川英郎解題。

(23) 右に同じ。

(24) 松浦友久・植木久行編訳『杜牧詩選』（岩波書店、二〇〇四年）、一五九頁。

(25) 斎田作楽編『吉原詞集成』（太平書屋、一九九三年）所収の影印参照。

(26) 注(1)に同じ。

(27) 注(1)に同じ。また、今関氏は梁川星巌も如亭の「剃髪を倣ったとも見られる」（「梁川星巌評伝（一）」『雅友』第五十八号、一九六二年十一月に初出、『江戸詩人評伝集　二』（平凡社、二〇一五年）に再録）とする。如亭に倣っての星巌の剃髪、また如亭の死後は髪を剃ることをやめ、総髪姿で一生を過ごしたことについては福島理子氏、山本和義氏が「星巌が剃髪して「詩禅」と称したのは、（中略）柏木如亭の生きざまとその姿に激しい憧れを抱いたことも、その一因だったのではあるまいか。なればこそ、星巌は如亭の凄まじい死を知り、彼の遺稿を上梓し、墓前に涙して、この敬愛する詩人の死を見送った、その直後に髪を剃ることをやめるのである」（『梁川星巌』研文出版、二〇〇八年、三十八頁）と指摘する。また、星巌の剃髪の経緯と、それが明治の漢詩壇にどのように伝承、受容されていたかについては長田和也氏「『近世佳人伝』「花扇伝」の典拠と梁川星巌」（『和漢比較文学』第五十八号、二〇一七年二月）に詳しい。

(28) 前掲内田氏論文「宮澤雲山詩稿『雲山居詩抄』について」に、書誌や刊本との異同について詳しく検討されている。また、『雲山居詩抄』の画像は国文学研究資料館の「新日本古典籍総合データベース」にて公開されており、インターネット上で閲覧可能。

(29) 内田氏は前掲論文「晩年の宮澤雲山（一）」においてこの詩を引き、承句を「薙珠断髪野僧如」と読み、「珠を薙り髪を断ちて野僧の如し」と訓じている。しかし筆者は「珠を薙り」では意味が通じないと考える。転句で「鬚髻」（頭髪の乱れた様）や「霜」（白髪）という自身の頭髪を、承句では「珠」と美しいものとして表現することに違和感を覚えるからである。ぼさぼさの白髪をすっかり剃ってしまったので、梳る面倒からも解放され清々した、という気持ちが読み取れる詩であるのに、自身の頭髪を「珠」と表現して惜別の念を表出しているとは考えにくい。また、「薙珠」は今のところ他に用例を見出せなかった。薙髪したことを詠じるのに「断髪」というのもやや不自然であり、雲山が踏まえた如亭の詩には「頭髪除來」とある。以上のことを踏まえ、また稿本の字形から判断して「薙除頭髪」に改め、「頭髪を薙り除きて」と訓じた。

(30) 揖斐高「柏木如亭年譜考証」（『柏木如亭集』三樹書房、一九八一年六月）は、この雲山の詩を引いて「（雲山は）生前の如亭とも面識はあったであろう」としている。また、揖斐氏は、如亭の没後に星巌が如亭の墓や旧寓を過り、たびたび如亭を偲んで作った詩を引いている。京都を訪れた際に

如亭の墓の苔を払うことは、星巌以降の文人たちにも継承されていったと思しく、遠山雲如や植村蘆洲にも如亭墓参の詩がある。植村蘆洲の如亭墓参詩については池澤一郎「漢詩を読む楽しみ - 『枕山詩鈔　七言絶句』に即して - 」（『日本文学研究ジャーナル』第四号、二〇一七年十二月）に詳しい。